

授業改善プラン

地域名	東上総教育事務所	学校名	大多喜町立大多喜小学校
-----	----------	-----	-------------

1. 課題（これまでの全国学力・学習状況調査結果等から）

- 令和4年度及び5年度の全国学力・学習状況調査の結果を分析すると、記述式の設問の正答率が特に低く、指導事項別に見ると、人物の相互関係や、人物像・全体像を読むこと、自分の考えをまとめることに課題があった。それらを「読むこと」の学習過程に当てはめて分析したところ、「構造と内容の把握」、「精査・解釈」、「考えの形成」に課題があることが明らかになった。
- 研究推進委員会を中心とする話し合いでは、国語科では「資質・能力の系統を意識した授業ができていない」という指摘があった。算数科の場合には、教師が、これまでの既習を想起させる発問をするなど、資質・能力の系統を意識して指導にあたる姿が見られ、児童も既習を活用しながら、資質・能力を身に付けようとしている。しかし、国語科の場合には、教師が資質・能力の系統を意識して指導することが十分ではなかったことが明らかになった。児童の視点では、学年が変わっても国語科の学習は教材が変わるだけで自分にどのような力が身に付いたのかよくわからないと感じているのではないかという実態が指摘された。

2. 取組のポイント（仮説、改善方法等）

- 研究仮説
- 資質・能力の系統を捉え、「言葉による見方・考え方」を働かせて読むことで、主体的に考え、表現することができるだろう。
- （仮説について）
- ・「資質・能力の系統を捉える」とは、教師が、資質・能力の系統を捉えて指導にあたること、児童が身に付ける資質・能力を捉えて学ぶことを表す。学習の系統性を重視することで、資質・能力を螺旋的・反復的に繰り返し指導し定着させることをねらいとした。
 - ・「言葉による見方・考え方を働かせる」とは、教師が見方・考え方を捉えて指導すること、児童が見方・考え方を働かせて読むことを表す。そうすることで、身に付ける読みの視点を明確にし、児童の学びの自覚を促すことをねらいとした。
- 以下の視点を、『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラムと関連させて授業実践に取り組んだ。
- ①資質・能力の明確化
 - ②「言葉による見方・考え方」の把握
 - ③「言葉による見方・考え方」を基にした振り返り

3. 具体的な実践

○学習系統表の作成

単元で身に付ける資質・能力や働かせたい見方・考え方を系統表にまとめ、指導に活用している。この系統表を活用することで、教師は指導の視点を明確にし、児童は読みの視点や身に付けた既習の読み方を自覚した上で、学びに向かうことをねらいとした。

○学習計画表の活用

学習の見通しをもたせるため、単元のはじめに児童と立てた学習計画を大型提示装置に示した。学習計画に身に付けたい資質・能力と既習の学びを示し、この単元における読み方を書き加えることで、新たな学びの習得を自覚させることをねらいとした。

○わかぎっ子「読み方」JUMP

本校で取り組む学習指導方法を「わかぎっ子『読み方』JUMP」としてまとめた。国語科の授業を担当する教師が、この「読み方」JUMPを基に指導を展開することで、全校で統一された指導がなされ、どの学級においても、また、児童が次の学年に進んでも、資質・能力を身に付けやすくすることをねらいとしている。

4. 成果

○児童のノートには、自分がどのような見方・考え方を働かせ、その結果何ができたのかについて振り返る記述が多く見られるようになってきた。このことから児童が、資質・能力を意識して学びに向かっている様子がうかがえる。

○系統表や「わかぎっ子『読み方』JUMP」を活用することで、資質・能力を意識した授業改善がなされている。また、職員室では、国語科の授業づくりについての話題が増え、授業改善の意識が高まっている様子が見られる。

◆担当指導主事から（東上総教育事務所 指導主事 積田 裕子）

○全国学力・学習状況調査の結果の分析をもとに、教師の視点からの課題と児童の視点からの課題を整理して、授業改善の手立てを明確にすることができた。今年度は、「読むこと」における指導の系統について整理することで、「言葉による見方・考え方」を働かせた授業改善につなげるとともに研究授業を積み重ねてきた。教職員の学力向上を目指した授業改善の意識が高まり、校内研修の充実が見られている。